

上海病院にて桐箱に入った恩賜の繻帯と恩賜のタバコ
一〇本入り一箱が下賜された。傷も治り痛みがないので
内地送還となった。病院船ミツホ丸で帰還した。軍司令
官、松井石根閣下が、畑閣下と交代され、同じ船に乗っ
ておられた。途中、大阪港にて松井閣下と関西の患者を
降ろし、東京へ直行した。

私たちは芝浦港で上陸、盛大な歓迎を受けながら牛込
第一陸軍病院に入り、日一日と快方に向かった。野戦病
院に長く置かれたら、これほど早く全治しなかったと思
う。戦後、中川軍医宅へお礼にいった。

湖南省における悪戦苦闘記

奈良県 川本 義徳

オッサンに召集令状がきた

昭和十八年七月二十一日の正午ちょうど、昼食時に家
内と今度出産する子供の話の最中に、役場の吏員が赤紙
(召集令状)を持ってきた。

堺市の第二十五部隊に無事入隊、そして七月二十八日
最後の面会、翌二十九日夜行特別軍用列車で九州博多へ、
翌三十日夜わが祖国日本を後に博多港から関門海峡をわ
たり、さらに玄海の荒波を越え、朝鮮の釜山港に上陸、
そして北鮮經由で大連へ。

二日後に南満州鉄道にて北上、満州国虎林駅に到着。
ここで大東亜戦争急を告げる北満国境警備の任についた
のである。これがわが独立輜重兵第五十四部隊(通称六
〇〇〇部隊)の第二中隊の一兵士として軍隊生活が始ま
るのである。

満州の軍隊生活に慣れたころ、わが独立輜重兵の六〇
〇〇部隊に大移動命令が下った。早速準備完了して、南
満州鉄道で南下、あの有名な万里の長城を望みながら山
海関を過ぎ、数日後、旧首都南京に到着した。

そして揚子江南岸の無湖で下車し、一時駐屯して以後
の作戦行動の準備に追われた。一週間ほどして無湖から
当面の目的地の武昌まで長江沿いに約八〇〇^キの行程を
馬匹編成して、毎日露宮を重ね、泥濘と悪路に悩まされ、
途中は大した事故もなかったが苦しい長い長い挽馬大行

進が毎日続いた。途中、名所遺跡のある所も通過したが、ただ変形した軍靴を引きずって、辛苦多々の行進を続けた。今から考えてみたら実に惜しい気もする。

ついに漢口、漢陽と共に武漢三鎮といわれるあの武昌に到着したが、ここで苦しい行軍が終わった。この武昌こそ、これから以後二年間にわたる中支戦線におけるオッサン兵たちの奮戦苦闘と幾多の戦友との永遠の別れとなる戦闘行動の起点地であった。毎夜、漢口の日本租界に敵機編隊の爆弾投下が行われた。地上からは幾条かの探照灯が空中に輝き、高射砲は間断なく地上から発射されていたが、なかなか命中はしないし、またわが空軍の追撃も全くなき、制空権は敵にあった。敵機は爆弾を投下し終わると、悠々と飛び去っていった。

我々末端の兵士はこうした戦局を全く知らないし、また知らされることもなかった。ただ命令に従うのみであった。そしてこの地で私物一切を残していよいよ敵最前線へ突入することとなり、もはや故郷との音信も全く途絶え、相互の様子は全然分からず、また知る由もなく、ただ分かっているのは今自分が生存していることだけで、

分からないのは明日の命である。

昭和十九年五月二十八日わが六〇〇〇部隊の第二中隊（山口隊長）は崇陽において弾薬を積載し、平江へ輸送の任務をもって出発したのである。しかし、その行動地域は車両部隊の行動には不可能な地帯であるために、武昌において駄馬に改編された。

崇陽、通城、梅仙、平江道を平江に向かって前進するも通路は寸断され、部隊は通路脇の側溝か水田の畦道を通行するほかなかった。しかしその側溝も長期にわたる雨期のため泥濘と化し、水田の畦道も田植え後の満水のため地盤がゆるみ、先頭部隊の通過で崩壊し、一面の泥海と化し、先行の道路斥候兵の誘導により先頭小隊は辛うじて通過しても後続小隊の通過はたちまち不能となり、道路修理班の労苦もほとんど効なく、兵は行動開始当初より悪路に悩まされ、疲労した。

加えて駄馬改編の不馴れのため我々将兵の苦労は言葉に言いつくせぬ状態であった。一日にして人馬ともに疲労し、日を追うに従ってその極限に達する。

橋のない河中の渡河によって、足の受傷者多発し、

歩行困難のまま前進する姿は見るに忍びないものがあつた。

漸く全員が平江に到着したのは六月六日の夜半に及んだ。また後方收容班の労苦は並大抵のものではなかつた。

梅仙付近において敵の襲撃を受け、疲労極限、苦戦しながら近くの工兵隊の援軍によって危機を脱出して、九日に辛うじて平江に到着の状態であつた。この戦闘で山本上等兵は敵の迫撃砲の破片創にて戦死し、救援隊に参加した浜西兵長も胸部に敵弾貫通し翌日十日に戦傷死するの難にあつた。この平江においての傷病者三〇人を平江の兵站病院に入院させたが、出発後旬日でも多くの犠牲者を出したことは、この行動が如何に難行であつたかを物語っている。平江に到着した中隊は平江―新市間の区間の輸送に任じた。

状況は極めて悪く、わが二中隊の宿营地前面の丘陵地の奪回をはかるものの、輸送に中隊の主力が当たっているため残留部隊は二個分隊ほどで、敵襲にあい、その防戦で我々兵士も自信を得、勇気づけられ、以後の戦闘に相当役に立った。この平江も七月の中ごろに全員撤収に

決し、わが軍の兵器弾薬の新市輸送の完了は焦眉の急となつた。わが第二中隊は全力をあげてこの輸送にあつたが、兵員の不足と病馬の続出で容易にその任務を達成できない状態であつた。

ここにおいて兵器弾薬の水路輸送を企図し、小隊長以下七五人の兵をもつて輸送の水路船団を編成し、泊水を新市に向かつたのであるが、途中で兩岸から敵兵の急襲を受け、応戦に努めた。しかし不幸にも戦闘中数名の戦死者と生死不明者を出す状態となり、仕方なく兵器弾薬は全部水没の処置を講じて、漸く部隊を集結收容して平江へ引き返すのやむなきにいたつた。

七月二十一日に平江へ引き上げの命令を受け、わが中隊は平江の兵站病院の患者ならびに貨物その他輸送指令部の物資を積み、平江から語口―新市道を新市に向かつて前進した。

語口付近の五里兵において敵の集中攻撃を受け、中隊は前後両断され、後方の患者輸送分隊と後方收容班は分断孤立してしまつた。直ちに迫撃砲、重機関銃をもつて応戦するも山間道の地形はわが方に利あらず、地の利を

得た中国兵の便衣隊の攻撃を受け、ますます戦闘は激しくなり、翌朝まで苦戦の末、漸くにして敵を撃退したが、今中兵長以下数人の戦死者を出した。

今中兵長は私の満州駐屯時代からの無二の戦友であった。また語口―新市道は至る所に地雷が埋設されて、進軍は極めて危険で、探雷班を編成して先行させ、わが中隊の安全通過を容易ならしめたのであるが、この状況下では兵員の歩行のみでも甚だ困難危険であるのに、馬匹を引いての行動には兵士たちも皆びくびくしていた。

地雷埋設箇所らしい所には探雷班が紙片をもって印をして歩行するのであるが、風で散ったり、横へ移動していたりするものが多く役に立たず、そのために兵隊数人が大怪我をしてしまった。

新市到着と同時に、患者や貨物など兵站病院やその他のわが軍の各歩兵部隊等へ引き渡して任務を完遂するも、食料は全くなく、兵站において若干の米の補給を受け、何とか飢えをしのぐ状態であった。さらにわが中隊は弾薬や糧秣を受領して長沙へ輸送のため行動を開始した。新市―長沙道も破壊は甚だしく、その上敵機の機銃掃射

を受け行軍ははかどらず、こうした反復攻撃のため中隊は逃避・集結を繰り返す状態である。このため行軍はますます遅れ、悪路との戦いと共に人馬の疲労も甚だしく、鞍傷馬が多発して、その上柄馬や病弱兵の続出となった。また新市出発以来、食糧の補給は一切なく、物資や食糧の徴発も意に任せなかつたので、疲労困憊はその極に達し、我々将兵は生死の意識もはっきりせず、ただ息をしているというだけの状態で八月十一日どうにか長沙に到着した。

長沙では、次期作戦のため待機していたのであるが、兵員は減耗して七十余人となり、病馬の多発と相まってわが中隊の輸送力は相当に減退した。長沙でも食糧は現地調達だった。

八月中旬、わが第二中隊は第三中隊と共に株州に向かって前進した。依然敵襲や敵機の襲来は激しかったが、大した損害もなく、八月二十六日には株州に到着した。

崇陽出発以来、山また山の山間地帯を歩き続けてきたわが将兵は、株州に通ずる鉄路に出た。久し振りに見る鉄路は全く懐かしく、内地を思い出させるのに充分で

あった。

中隊は株州の街外れにある発電所跡の破壊された家屋付近の部落に露営して、即日わが中隊の主力をもって彈薬・糧秣を受領し、夜間を利用して出発、株州の東南六〇^〇の地点にある醴陵に孤立している歩兵混成旅団への彈薬・糧秣の補給輸送を行った。わが中隊はこの六〇〇^〇の道を突破して、歩兵部隊への補給を完了したのであるが、その当時はこの醴陵は敵の完全包囲下にあり、友軍の歩兵部隊は孤立していたため、食糧や彈薬も全部尽き果てて、非常に危険な状態にあったので、この補給は歩兵部隊から大いに感謝されたのである。

株州―醴陵間の区間輸送の任務は、翌二十年一月まで続いた。我々孤立輜重兵の本領は、第一線の歩兵部隊や戦車部隊のような戦闘能力がなく、第一線の戦闘部隊に彈薬や食糧等を補給する輸送部隊である。これを狙って輸送道路を小刻みに破壊し、地雷を埋設し、輸送妨害や襲撃を繰り返され、宿泊地は敵機の爆撃の目標になり、何度も爆弾投下されたが、幸い不発に終り、命拾いしたこともあった。

明日ありと思う心の仇桜

夜半に嵐の吹かぬものは

という御説法のごとく、人の世は一寸先すら闇である。その生死運命は全く予測できない。私が現在にいたるまでの長い人生の生涯を振り返ってみて、よくぞ今日まで生きてこられたという不思議な思いがする。軍隊でのわれら兵士たちの戦地戦場における日々は、生死これ紙一重の連続であった。

後世の人々に平和な世界を築いてもらうためにも、我々の命がけの戦争体験を風化させてはならないと思ふ。

湘桂作戦

岐阜県 道下 政太郎

昭和十九年五月十三日未明、わが輜重金隊出動開始。

本部以下自動車隊一、駄馬中隊四の一個連隊、自分は相変わらず大野重機分隊の軽機であった。将校の指揮するまま護衛の任で行動。広水、孝感、武漢三鎮、崇陽、長